
時乃一探偵事ム所の日々よ

エレメンツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時乃一探偵事ム所の日々よ

【Nコード】

N6452A

【作者名】

エレメンツ

【あらすじ】

さあ、残務処理だ！書類との格闘だ！ついでに美女も格闘だ（？）
愉快な探偵事ム所の日常は、そう！ある一人の人物によって打ち碎かれる！だが、その人物は気絶してしまった！さあどうする時乃一
探偵事ム所！依頼は始まったばかりだ！

第一話 時乃一探偵事ム所の日常

第1話 探偵事ム所の日常

事後処理、というのは思いのほか時間が掛かる。例えば交通事故。車同士の事故を例に挙げれば、各々の立場の確認から免許証の確認、損害の確認から警察を呼んでの簡単な実況見分、更にどちらに非があるかの確認に加えて保険のやりとり、会社勤めならば上に報告、その後に謝罪の訪問——簡単に上げただけでもこれだけの事をやらなければならない。

無論、色々飛ばしている工程もあるため、一日二日ですむものではない。それが、探偵業に変わったとしても、それはある。

そう、残務処理という名の書類との格闘が……！！

「くっそ……！！ 楓子ちゃん、これ、先方さんに確認！ 金額がズレてる！」

「ええ！？ わたくし、今現在料金計算中なのですけれど！」

彼らがいるのは、とある探偵事務所。その主要メンバーである二人は、なぜかこうして書類事務を行っているが——その理由は至極簡単。人数がいらないのだ。大手ならば、書類を主に扱う事務員がいるのだが、全員合わせても四人しかいないこの探偵事務所では、主要メンバーで実動員でも、書類業務をしなければならない。しかも、それは依頼主が大手になればなる程書類での確認を求めてくるその分、確認も多くなり——手間が増えるのだ。

「だから大手は嫌なんだよな……！ 何かにつけて、書類書類だら！」

「優斗様！ 確認終わりました！」

せわしなく書類を片付ける二人を見渡せる位置にいて――何もしない人間が一人。美女度合いで言えば楓子より上で、当然の如く年も上だ。セミロングの碧髪に知的なメガネ、座っていてもわかる背丈の高さと、そこらのモデルなど相手にもならないプロポーシオン。上はワイシャツにベスト、下は太腿の際まで見えるスリットの入ったロングスカート。これが、ただそれだけのパーツをそろえた人間ならば別段、驚くに値しないが、彼女の特異を表していたのは、その両腕だった。ワイシャツの色に合わせた特殊なゴムを使い、両腕をがちがちに拘束しているのだ。まるで、苦行のために両腕を捧げた僧侶の如く。ただ違うのは、両肩に設置された機械の腕――簡単に言えばギミックアーム。両腕の代わりとなって動くソレは、更に彼女の特異性を現すと同時に、奇妙な不気味さかもしれない。「おー、頑張れ若人よ。応援はしているぞ？」

ピキリ、と何かがひび割れる音がした。数瞬の間をおいて、だん、と机が叩かれて怒りを隠さないままに楓子が立ち上がる。

「“所長”？　そのお発言は少々場をわきまえていないのではありませんか？　ただでさえ普段何もやらないのですから、こういうときくらい役に立たないと……無能認定してさしあげますよ？」

「喧嘩を売っているのなら特価で買ってやってもよいぞ？　勝てる喧嘩ならば買う主義だ、私は」

「いつぞやの借り、返して差し上げましょうか？」

始まった二人のやりとりを、またか……という思いで優斗が見つめる。こういった衝突も、この事務所では日常茶飯事である。この、時乃一探偵事務所においては。

雑多とした雑居ビル、その中でも少し広めの雑居ビルの五階。淵都・アラタヤドの中でも裏の領域と呼ばれる入り組んだ路地、入り組んだ建物の奥、普通ならば、普通の人間ならばその危険性故にくることのない地域のだ真ん中に近い場所に、この事務所がある。

時乃一探偵事ム所――そう銘打たれたこの事務所のメンバーを、そろそろ紹介しよう。

今現在、楓子と渡り合っているのが

・時乃一探偵事ム所の所長、時乃一 唯葉。

・身長 175cm 体重 ？？キログラム スリーサイズ…究極のグラマラス

時乃一探偵事ム所 所長。そのスタイルと長身、もとの美貌は、そこらのモデル

など一蹴するだけの魅力を持っているが、所員曰く、究極の気分屋。仕事に関しても気分次第で関わるか関わらないかを決める。なお、ソレに加えて究極の趣味人でもあり、更に言えば熱っぽく、さめやすい蒐集癖を持つ。この探偵事務所の出費の半分は彼女の蒐集癖によるものであったりする。彼女を現している最も特徴的な部分は、その両腕だろう。なお、年齢不詳。

手元だけを動かしながら、成り行きをはらはらした気分で見つめている男性の名前は

・刃剣・J・G・優斗。身長176cm 体重60キログラム、十九歳。

若干十九歳ながらも、この業界で働きはじめて既に五年、仕事に關しては真面目の一言

で、常に礼儀正しさを忘れない好青年。常日頃繰り広げられる喧嘩と、所長の出費に悩まされる苦勞人。最近はその苦勞にもなれてきたのか、心情と手の動きを区別するという奇妙な特技を手に入れている。戦闘能力も高く、実働部隊（三人しかいないが）の隊長を務めていて、戦術も得意。なお、趣味が裁縫という特技を持っており、自分の業務用マントは彼の自作である。

最後に、所長に食って掛かっている日本人形のような美貌を持つ美少女が

・楓子・A・R・ヴェルデ。年齢は今現在17歳。

・身長 157cm、 体重 42キログラム、 スリーサイズ…均整の取れたバランスタイプ

正に人形の如き顔立ちの美しさとするものが嫉妬するような黒髪

を脹脛まで伸ばし、そのスタイルも、流石に唯葉には劣るものの、十分に均整が取れているし、その黒髪や外見に良く似合っている。物腰は優斗に環をかけて更に丁寧で、言葉遣いも昔に存在した『純潔の日人』を思わせるものだが、その実はかなり言葉遣いがきつい上に、無意識にも、意識的にも相手の心を抉る言葉を発することが多々ある。確信犯気味であるらしい。

戦闘能力は高いが、運動能力自体はあまり高くない。実働部隊の隊員（三名しかいないが）であることに加え、広報・受付担当でもある。

なお後一人メンバーがいるのだが、今現在ある国のある組織に手助けを依頼され、そのために出向しており、不在である。そのため、今現在には以上の三名がこの事ム所を切り盛りしている。貧乏暇なしではあるが、メンバー構成を考えてみると忙しくても暇がない。当然といえば当然だが。

「あまり動かないと……たれますわよ？」

「……！　ほう、たれるほどない奴がよく言う。ああ、貴様の場合は、太る要因しか見当たらないのだったな」

「……！！　言ってくれますわね……！！　後悔しますわよ」

取っ組み合い寸前にまで発展している罵り合いは、両者互角であった。まだ、まだここまでならば何とか女性同士の喧嘩で住むが――ある一定のレベルを超えると、彼らの場合、ただの喧嘩では済まされなくなる。

「凶星か。ふ、いつかぶくぶくになったお前が優斗に愛想を付かされるのが目に浮かぶ。その時はぜひ花束を贈らせてくれ、京鹿子の花束をな」

「……う、うふふ、もう我慢できませんわ……！！　その憎たらしい脂肪の塊ごと、全て“喰べ” 尽くして差し上げますことよ！」

「やれるものならば、やってもらおうか」

ギミックアームを自分の腕のように構える唯葉と、片手で顔を押さえながら、ざわざわと髪の毛を蠢かせる楓子。もしもこの二人が

本気で戦ったら、それこそこのアラタヤドが壊滅することは間違いない。どちらの能力も危険極まりない上に、基本的に周囲を気にする人間ではないのだ。二人ともが。そして、その二人を止められるのがこの場にいたただ一人だけだということも——本人は否定したがっているが、事実である。

だがどちらかの肩を持てば、そのとぼっちは優斗へと向けられる。美女＋美少女に怒りの視線で睨まれた場合、生きた心地がしない——しかも、彼女たちの場合、返答次第では本当に死にかねないほどの目に合わされる可能性が高い。

事務所の一角にあるスペースは、丁度今、彼女たちが戦闘を繰り広げようとしている場所の間近にある。そこは、唯一優斗の私的なスペースで、とても大切なものが鎮座しているのだ。それは今まで度々被害にあっている。恐らく、今回もほおって置けば被害を蒙るのは間違いなく、それだけは、避けなければ。

盛大なため息をついて、立てかけてある剣を片手に二人の間に入るように立ち、すらり、とその美しい刀身を上段に構える。思いつきり振りかぶり、制止させる意味で振り下ろそうとしたその瞬間。

「あの……お仕事を依頼し」

扉が開き、この静寂と緊張を切り裂く突然の侵入者が見たものは！

1. 明らかに人間のレベルでない髪の高さを蠢かせている美少女
2. それを迎え撃つように構えているギミックアームで両腕を拘束している美女

3. なぜかその間に剣を振り下ろそうとしている奇妙な服を着た青年
それらを統合し、導き出された結果は！

「……ふう……」

ばたむ、と理解を放棄して己の意識を手放すことだった。

その後、全員が行動を中断させ、その人物の介抱に向かったのは言うまでもない。

第一話 時乃一探偵事ム所の日常（後書き）

書置き分の、一話目を記載することができました。もしかしたら、前に投稿したのと別になっていているかもしれない。なにぶん、なれないもので……それでも、見ていただけるなら、生暖かい目で見守ってください。

さあ、次はいよいよ依頼を受けますぜ、兄貴！
果たして、無事に解決できるのか？ 微妙にチームワークがあるんだかないんだかの時乃一探偵事ム所の所員たちよ！

第二話 探偵事務所の仕事

第2話 探偵事ム所の仕事

「落ち着いた？」

「え、ええ……」

水を飲んで気持ちを落ち着かせること小一時間。ついでに状況説明をし、決してすぶらったーな現場ではなかったことを説明する。あれが日常だといったら流石に啞然としていたが——常識から考えれば、あんな光景は確かに啞然とするだろう。驚くだろう。それだけ、時乃一探偵事ム所の人間の神経がおかしいという証明でもあるのだが。

「ごめんね。ええっと……名前は？」

後ろに控えている二人は、ぼつが悪いのか、そっぽを向いて照れ隠しにしているだけであった。そんな二人に怯えながらも、倒れた当人……帽子を取ってみれば、まだまだ若い見目麗しい美少女だった。年齢で言えば恐らくは13歳程度だろうか。

黒に白のメッシュが入った特徴的な髪色と左右の瞳の色が違うことを除けば、何処にいてもおかしくはない美少女ではあるが——平均のレベルからしてみればかなり上に外れているし、髪の色と目の色ははっきり言って不自然だ。

「は、はい。恵那……ルルヴェット・L・L・恵那です」

「L・L……僕や楓子ちゃんと同じ日系？」

「……はい」

刃剣・G・J・優斗、楓子・V・R・ヴェルデ。共に、英単語が

苗字に二つ入っている。

これは、ハーフであるということの証明ではなく、真逆……純粹な日本人の血を引いているということの証である。

淵都アラタヤド……昔は、新宿と呼ばれていたこの国——日本、今現在では日國と改名されたこの国において、純粹な日本人はほんではない。

数百年前——人口の減少に歯止めが掛からなくなり、一時は一億三千万に届こうとしていたそれも、数十年のうちに一億人を切ってしまった。その傾向に危機感を抱いた政府の人口増加政策が実行に移された。様々な人種との交雑や遺伝子治療、迷信から地域の知恵袋の活用まで、本当に政府の政策か？　と思われるようなものもありとあらゆる方法が試され——結局、それはさしたる効果を上げなかった。

だからこそなのか、発想の転換とも言えるのか。あるときから、人口の減少はピタリと止まった。どういった政策をしたのか、どういった事を実行に移したのか、諸説入り乱れたが、結局なんであつたのかが分からないまま——ほぼ同時期に、ある“もの”が発生しはじめた。

最初は、些細なことだった。新たに生まれた子供の中に——普通より、肉体的に、頭腦的に優れた子供がいた。それは、神童と持てはやされ、マスコミが騒ぎ立て、政府は自分たちの政策が間違っていないかつたと語り、ある宗教家は自分たちの神のおかげだと周囲を騒がせ、靈能者や占い師達は自分が行ったかのように誇った。

しかし——それが、肉体的な変質を生み出し始めると、状況は一変した。腕や脚が巨大に変質した子供、身体全体が醜惡に爛れてしまった子供、当初は神童と持てはやされた子供たちが成長した後も、それは終わらなかった。今度は、ただの肉体の変化に留まらない、それこそ超能力とも言えるべき力がその子供たち——通称ゼロチルドレンと呼ばれた者たちに備わっていった。物質を動かす力から、炎

や氷といった属性を操る力、意識を電子の海にダイブさせ、情報をさらう力——それこそ、人類が夢見た“能力”を彼らはその身に宿していた。

最初は混乱を——そして、その次には畏怖と羨望を。最後には、恐怖を。

人とは違う、人より優れた存在でありたい、という想いは誰にでもあり、それを体現した彼等と、普通の人間との溝は深まっていき、一度は人種差別的な大問題へと発展し、ゼロチルドレン達を虐殺する騒ぎにすらなった。そのことで彼らとの問題が表面化し——沈黙化と大騒動を繰り返した末、公的に彼らをサポートする法律が制定された。法律が施工されれば、罪になる事を恐れて、表向きの被害や犯罪は減少し——しかし、裏にはそれを逃れたものたちによる犯罪が増加し、今でも彼らに対する偏見は収まっておらず、不当な扱いを受ける場合も未だに根強く残っている。

そして、不思議なことにそれは純粋な日本人の血を引く者に数多く発露し、彼らと普通の日本人を区別するために、ゼロチルドレン及びその血に連なる人間たちには英単語を二つ挟んだ名を与えることとなり、その能力を持っている者たちの中で肉体・物質的な変化を持つ者達を“怪異持ち”、精神・知識的な能力が変動した者達を“改竄者”、超常的な能力を持つ者達を“能力者”と呼んだ。

とは言っても等級、ランク付けがあり、人の才能にも個人差があるように、誰もが誰も、桁外れの能力を持っているわけではない。優斗は勿論、楓子もそれが発露した日系人である。総じて彼らのことを“発現者”と世間的には呼んでいる。何故日本人に多く発露するのか、その原因は不明とされており、今でも研究が進められているらしいが、主だった成果は上がっていない。

そういった経緯の結果、純血の日本人はほとんどおらず、この国において日本人と呼ばれるものの大半がハーフである。

「僕達に仕事の依頼をしたい、ってことでいいのかな？」

「あ、はい。人探しを——姉を探してほしいんです」

人探し、という依頼に、一瞬、全員が顔を見合わせた。時乃一探偵事ム所に持ち込まれる表向きの仕事の中で、三番目に多い仕事だ。なお、一番目はペット探し、二つ目は迷子（迷い大人）探しである。思わず顔を見合わせてしまったのには勿論理由がある。普通の人探しならばいい。日数が立っていないものならば、比較的目的証言もあるために探しやすい。だが、一年、あるいは数年も経過した場合、その行方を掴むのは相当に困難な事となる。

加えて言えば、それが何らかの“組織”が関わっている事だとしたら、もっと厄介になる。当事者同士の話や戦闘で済む可能性はかなり低いだろう。だが、依頼を持ち込んだ人間を追い返すのはこの事ム所の主義に反するし、そうなると決まったわけでもない。

とりあえずは話を聞いて見なければ始まらない。

「姉さんを探して欲しい……か、まずは、詳細を聞かないとね。僕達は基本的にどんな仕事でも受け付けるけど……勿論、限界もある。出来ることと出来ないこと、そして、なにより——どんな結果になっても、それを受け入れること。それが条件だよ」

今までにも、そういうことが何度かあった。もうどうにもならない状況で、それを説明しなければならないことが。探偵という職業は警察組織と違い、ある程度の自由が聞く分、細かい所まで探し、行方不明だった人物を探し出すこともある。だが——そこにある事実は、必ずしもいい結果をもたらすとは限らない。

故に、探し者・物に関する依頼を受ける条件は唯一つ。“どんな結果になってもそれを受け入れること”。

威圧感はないが、それ以上の何かの力が働いて、思わず息を呑む。同時に、考えられる限りの最悪が頭の中を駆け巡り——それでも、と心を決める。

「それでも、お願いします。どんな結果になっても——受け入れなきゃ、ならないとおもうから」

その瞳の意思を見て、後ろの二人に合図を送る。正直な話、人探しは労力の割りに実入りが少ないのだが……断る理由は見当たらない

かった。楓子は元々断る気もなく、最終的な決定権を持つ唯葉としても、今現在の経営状態を理解しているために、仕事の選り好みは出来ないことを知っている。

楓子はそのままお茶の用意をはじめ、優斗は改めて恵那と向き合う。

「さて、と……まずは、そのお姉さんの名前と、後、写真かなにかはあるかな？」

「え、あ、はい。これです。今年の初めに撮ったものなので、外見に変化はないはずです」

差し出された写真には、今日の前にいる恵那と、それを一回り大きくして美人にした女性が移っていた。美人度言えばこの事ム所の二人に劣っていない。思わず『へえ……』という呟きがもれるのも仕方のないことで――後ろから、合計四つの痛い瞳が向けられるのも、仕方のないことだ。

殺意に変化しつつある威圧感をひしひしと感じながら、咳を一つして話題を戻す。

「失踪したのは何時頃？」

「この写真から二ヶ月くらいです」

「っていうことは、一カ月半か……微妙な時期だな……」

少し表情を曇らせたのは、家出か、それとも違うのかが判断の付かない時期であるからだ。今時一ヶ月程度の“プチ家出”など珍しくない。

「姉さんはそんなことはありません!!」

「あ、うん、いや――そうかもしれないね」

ばん、と机を叩いて立ち上がり、力説を始めようとする恵那に、脇からお茶を差し出しながら楓子が続ける。

「そうして失踪した人間が何人いるか知っているかしら？ 人の心は誰にも分からない。それが例え血を分けた肉親でも。ねえ貴女？

貴女は、本当の姉さんの姿をどれだけ知っていたのかしら？ 本当に理解できていたと心から言えるのかしら？」

言葉はナイフとなって心を抉る。遠慮も思慮もない言葉は——その代わり、ある側面としての事実を恵那に突きつける。楓子は、こういう言葉に対してわりと遠慮がない。相手の心がどうであれ、単刀直入に事実を告げる。確信犯的に繰り返すことが今までも度々あるが、今回のソレは、ただの嫌がらせなどではない。そういう真実の可能性を肝に銘じておけ、と言外に行っているのだ。

「楓子ちゃん」

「あら、ゴメンナサイ。というっかり事実を言っちゃいましたわ。ふふ、適度に落ち込んでくださいな」

にこやかに黒い笑い声で立ち去っていく楓子の口元は、まったく笑っていなかった。

いろんな意味で恐怖を感じて身体を硬くしている恵那を見て、なんともいえない笑みで話を再開する。

「ま、まあ、楓子ちゃんの言葉は少し言いすぎかもしれないけど……事実でもあるんだよ。実際、肉親でも知らないことは多いからね。分からない悩みを抱えていて、それに気付かなかった……なんてケースもざらだし」

「……はい」

「とりあえずは、名前と……何処に通学してたとか、家の場所とか、行きそうなところとか、知り合いとか……思いつく限りの事を言ってもらえるかな？」

「はい、名前は、リルヴェット・L・L・奈津子で、歳は二つ上の15、私が通う八頭学院の高等部に通っていて——」

対象となる人物の名前から趣味、特徴、どういう行動パターンが多いのかも全て別の紙に記していく。時折間に無駄な話も織り込みながら——三十分程度で大体の情報を列記することが出来た。

詳細としては——

対象者…リルヴェット・L・L・奈津子

年齢…15歳 身長…160cm前後 体重…50kg程度

スリーサイズ…75・55・78

中部部から噂の美少女で、成績は上の中。運動神経こそあまりよくないが、優しい性格で、下級生や同級生からの人気は高く、生徒会のメンバーにも選ばれている。

悩みといえばスタイルが悪いことで、それを補うために日夜色々な商品を試しては失敗して唸っていたらしい。

良く行く場所は女子高生の例に漏れず様々なアクセサリーショップやファッションに関する店やフルタイムショップなど。怪しい、というべきところはあまりないし、発現者だと言っても、それは外見的に奇麗であるというレベルに留まっているらしく、失踪するような恨みややつかみを受ける理由としては少々難しい。

両親は健在だが単身赴任中……少しだけ気になるとすれば、両親がかつては発現者を排斥する運動を行っていた、という程度だろうか。だが、そういう人たちも、自分の子供がそうなってしまってもかは考えを改めた、という例は少なくない。誰だって自分の子供は可愛い……無論、そういう人たちは別の街に引っ越すなどして、排斥から逃れていったが。

「うーん……」

「どうですか？」

「聞いた限りじゃあ、失踪する理由は見当たらないな……自分達で探したり、警邏組織に人探しをお願いしたことは？」

「ありますけど……見つからなくて。警邏組織も、ある一定期間を過ぎたら、捜査を打ち切っちゃって……」

人探しは最初こそ大事になるが、見つからなければどんどんと人員は縮小されていく。特に、淵都アラタヤドにおいては、他の町よりも発現者の割合が高い。そういったものたちに襲われて——ということが起こらないとは限らないし、その可能性は高い。

暫く腕を組んで考える。怪しい部分はない。ごく自然(?)な失踪事件ではある。だが——恵那の心配振りは本気だし、調査もせず突っぱねるのは主義に反する。やれるだけやってみるしかないだろう。

「あの……受けて、下さいますか？」

黙っている優斗を見て不安に思ったのか、ぎゅ、と胸元で不安げに手を丸め、上目遣いですがるように彼を見つめていた。その目を見て、決心も固まる。

「いや、受けるよ。とはっても、過剰な期待はしないで欲しい。何か分かるかもしれないし、分からないかもしれないし……それでもいいなら」

「いいのですか、優斗様」

お人よしの典型ともいえる返事に、半ば呆れるように楓子が耳打ちする。

「うちの主義は、依頼ではなく依頼人を選ぶ。だよね？」

「……そういえば、そうでしたわね。所長？」

振り返ったその先には、最終決定権を握る最高権力者の姿が。なんともしえない表情のまま、器用にギミックアームで何かを楓子に投げつける。空気を切り裂いて突き進んでくるソレを片手で見事にキャッチすれば――驚くことはない、契約書だった。

胸元に刺してあるペンと契約書を机の上におき、空っぽになった湯飲みを下げる。

「それじゃあ、このこと、ここに名前を……あと、あんまり言いたくないけど、お金は？」

「両親からある程度は貰っています。ここに表示されている金額なら何とか出せます」

「じゃあ、契約成立だ。この写真は参考資料に預かるけど……いいかな？」

「はい！　お願いします！」

元気に、そして嬉しそうにお辞儀をして事務所を退室する恵那を見届け――楓子と顔を見合わせて立ち上がる。一度受けたら後は迅速に。スピードと依頼完遂がこの仕事の生命線でもある。

向かった先は、いくつものコートがかけてある衣装棚。右から三つ目、黒を基準にした造詣の複雑な上下別のコートを選ぶ。気分で

いつも選んでいるが——今回は久々の個人依頼。リフレッシュをするためにも、いつもの落ち着いた優しい色のコートとは違う、少しだけ攻撃的なそれだ。

それを羽織る彼を、熱に浮かされたように見入り、楓子は身体を振るわせる。彼の熱が自分に伝染したかのように、彼女もまた、表情を鋭くしていく。

「さて、と。じゃあ、行こうか？」

「はい。どこまでも、いついていきますわ」

二人の目配せは完璧。いつも指示する立場にある唯葉は気付いていない。ある意味で、術中にはまっていることを。

「それじゃ、所長、残務処……理お願いします！」

ぼっ、と僅かな隙について二人は事務所の扉をぶち破るように外に出て行つた。階段を下りる音など聞こえず、何かがはためく音が外から聞こえる。

半ばあきっぱなしになった扉から吹き込む風が、二人の机の上にあった某企業からの書類を唯葉の手元に運んでくる。

「……おのれ」

そこに記されている不可解な単語と専門用語と金額の嵐に、目頭を押さえて唸るほかなかった。九回二死満塁、逆転満塁ホームランの瞬間であった。

第二話 探偵事務所の仕事（後書き）

アクションを書こう、と思っていましたが、そこまで到達できませんでした。

まだ操作になれず、同じタイトルの小説がいくつか投稿されてしまったことにお詫びを申し上げます。

まだまだつたない文章ではありますが、気を長くしてお付き合いいただけたらいいな、と思っています。

キャラクターのプロフィールを中途半端に乗せてしまいました、これについては感想でご希望があれば書いていきたいと思っています。

よければ、感想をお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452a/>

時乃一探偵事ム所の日々よ

2010年10月11日01時24分発行